



一日一日を大切に…

最近、こんな新聞記事を目にしました。小学6年で骨肉腫を患い、病氣と懸命に闘いながらもわずか13歳で短い生涯を閉じた猿渡瞳さんが、ある弁論大会で読んだ作文です。

みなさん、みなさんは本当の幸せって何だと思いますか。

実は、幸せが私たちの一番身近にあることを病氣になったおかげで知ることができました。それは、地位でも、名誉でも、お金でもなく「今、生きている」ということなんです。

私は、小学6年生の時に骨肉腫という骨のガンが発見され、約1年半に及ぶ闘病生活を送りました。この時、医者にも、病氣に負ければ命がないと言われ、右足も太ももから切断しなければならぬと厳しい宣告を受けました。

初めは、とてもショックでしたが、必ず勝ってみせると決意し、希望だけを胸に真っ向から病氣と闘ってきました。その結果、病氣に打ち勝ち、右足も手術はしましたが残すことができたのです。

しかし、この闘病生活の間に、一緒に病氣と闘ってきた15人の大切な仲間が次から次に亡くなっていきました。小さな赤ちゃんから、おじちゃんおばちゃんまで年齢も病氣もさまざまです。厳しい治療とあらゆる検査の連続で心も体もボロボロになりながら、私たちは生き続けるために必死に闘ってきました。

しかし、あまりにも現実には厳しく、みんな一瞬にして亡くなっていかれ、生き続けることがこれほど困難で、これほど偉大なものかということを思い知らされました。

みんないつの日か、元気になっている自分を思い描きながら、どんなに苦しくても目標に向かって明るく元気にがんばっていました。それなのに生き続けることができなくて、どれほど悔しかったことでしょう。

私のはっきり感じたのは、病氣と闘っている人たちが誰よりも一番輝いていたということです。そして、健康な体で学校に通ったり、家族や友達とあたり前のように毎日を過ごせるということが、どれほど幸せなことかということです。

たとえ、どんなに困難な壁にぶつかって悩んだり、苦

しんだりしたとしても、命さえあれば必ず前に進んで行けるんです。生きたくても生きられなかったたくさんの仲間が命をかけて教えてくれた大切なメッセージを、世界中の人々に伝えていくことが私の使命だと思っています。

今の世の中、人と人が殺し合う戦争や、平気で人の命を奪う事件、そして、いじめを苦にした自殺など、悲しいニュースを見る度に怒りの気持ちでいっぱいになります。一体どれだけの人がそれらのニュースに対して真剣に向き合っているのでしょうか。

私の大好きな詩人の言葉の中に「今の社会のほとんどの問題で悪に対して『自分には関係ない』と言う人が多くなっている。自分の身にふりかからない限り見て見ぬふりをする。それが実は、悪を応援することになる。私には関係ないというのは楽かもしれないが、一番人間をダメにさせていく。自分の人間らしさが削られどんどん消えていってしまう。それを自覚しないと悪を平気で許す無気力な人間になってしまう」と書いてありました。

本当にその通りだと思います。どんなに小さな悪に対しても、決して許してはいけません。そこから悪がエスカレートしていくのです。今の現実がそれです。命を軽く考えている人たちに、病氣と闘っている人たちの姿を見てもらいたいです。そしてどれだけ命が尊いかということを知ってもらいたいです。

みなさん、私たち人間は、いつどうなるかなんて誰にも分からないんです。だからこそ、一日一日がとても大切なんです。病氣になったおかげで生きていく上で一番大切なことを知ることができました。

今では心から病氣に感謝しています。私は自分の使命を果たすため、亡くなったみんなの分まで精いっぱい生きていきます。みなさんも、今生きていることに感謝して、悔いのない人生を送ってください。

(原文をもとに一部修正しています)

2009.2.8付 朝日新聞より

ご意見ご感想をお寄せください。
